

2013 年度活動テーマ
さあいよいよ本格的に
暮らし見直し総点検

【ものづくり 人づくり 地域づくり】

常総生協のお米が全て新米で出そろいました！

お米の定期購入メンバー（新規契約）を募集中です！

この秋、せいきょうのお米生産者と「縁」を結びませんか？



田んぼのある風景をいつまでも・・・ ぜひ、定期購入（契約）をご検討ください。

今年も美味しいお米ができました。将来に向けて、安全で内容確かなお米や田のある風景を保全する為には、安定した消費が必要です。少量からでもかまいません。ぜひ定期購入（契約）をご検討下さい。

「昨年度産のお米（めぐみちゃん）を「みんなで食べろうキャンペーン」（中間報告）毎年生協では、年度の途中でお米が無くならない様に「少し多め」で生産者にお米を確保して頂いています（2012年産は35t）。ところが、今年は少し余り気味。そこで、新米の季節ではありますが、「みんなで少しずつでも食べろうよ」と始めた今回のキャンペーン。皆様のご協力もあり、残り2.6tまで消化出来ました。ご協力感謝！※次週の折込で古米を企画予定。

【特集】チェルノブイリ事故後27年の今。 ベラルーシ視察報告①（国立放射線学研究所）編 （本紙3ページ）



今回の視察団（詳細P3）

福島原発事故から3年。私たちの生活は一変し、食品や子ども達の遊び場、住居に至るまで検査し、対応してきました。でも、どこかで「もう大丈夫じゃないの？」という感覚が世の中に漂っています。「もう過去のこと」と。

チェルノブイリ原発事故から今年で27年。事故後懸命に対応し、「過去のこと」にしてこなかった現地ベラルーシの様子を、常務理事藤田が取材しました。2週連続で報告します。

みんなで32.4t
食べました！



ベラルーシ視察報告①～国立放射線学研究所～（常務理事・藤田）



今回の訪問団のメンバー
(後方左から4番目が藤田)



ゴメリはベラルーシ南東部に位置する
ベラルーシ第二の都市

今回、1986年に起こったチェルノブイリ原発事故直後より、長年に渡りベラルーシへの医療支援活動を行っている**日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）の訪問団**に同行させていただく形で、ベラルーシ共和国・ゴメリ州の現地視察を行いました。今回を含め2回に渡って、自らの目で見たこと、聞いたこと、**27年経った現地の様子**などを皆さんに報告します。

訪問団のメンバーはJCFの医療関係者の他に、福島県飯館村出身で現在は福島市に避難中の保健師さん、郡山市で子どもを放射能から守る女性グループで活動中のお母さん、北海道で地質調査・研究を行っている大学の先生、原発事故後、福島の現状を取材しているフリーの映像作家と多種多様なメンバーが集まりました。

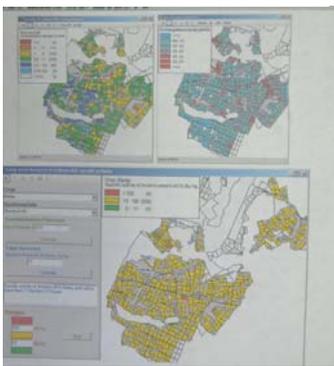
我々が訪れたゴメリ州は、原発事故によりベラルーシ国内で最大の被害を受けた州で、チェルノブイリ原発から約150kmのところにあります。9/8に成田を出発し、モスクワを経由（飛行機で10時間）し、列車でベラルーシ共和国ゴメリ州に入りました（12時間）。6日間の日程のうち、3日間は移動という忙しい視察になりました。



国立放射線学研究所

国立放射線学研究所

1986年6月チェルノブイリ事故を受けて旧ソ連がベラルーシとウクライナの2ヶ所に設立した放射能専門研究所。ソ連解体後の現在でも87名の職員が在籍し、食品の放射能濃度だけでなく、土壌検査、サンプル開発、食品への移行率などさまざまな研究が行われています。



農地の汚染分布マップ

東京でオリンピックをやって大丈夫なの？

国立放射線学研究所のアヴェロン所長は、福島第一原発事故後、何度も日本を訪れており、多くの人々が苦しんでいる姿を見て本当に悲しいと嘆いていました。そんな中、まず私たちに「**東京でオリンピックをやって大丈夫なの？**」と投げかけました。27年経った今でもベラルーシの作物は汚染されている。フクシマにも時間が必要だし、チェルノブイリに比べればフクシマの状況はそこまで悪くはないが、外国人は同じだと思っている。そこでオリンピックなんてとんでもない。日本の専門家はしっかりしているが、はっきり言って問題は政治家。政治家に話が通らない（理解されない）と物事が動かないからとても難しい、と。

ベラルーシは広大な国土が国有ということもあり、日本の「除染対策」ではなく「**集団移動**」や農地に関しては汚染分布マップを作成し、農作物の移行係数データから、「その土地ごとで栽培に適した農作物を測定し、管理・利用する政策（**レインボー政策**）」を実施しています。このことは「汚染された農地においても、その土地に住み農業を続けていこうとする農家を精神的にもバックアップするものだ」とアヴェロン所長は言います。



ヴィクター・アヴェロン所長



【次回予告】ベラルーシ視察報告②

ゴメリ州ベトカ地区で生活する住民の様子や病院で行われている健康調査の実態に迫ります。

子どもたちは原発事故でどのくらい内部被ばくしたのか？

先週、2011年3月～4月にかけて測定された空気中のヨウ素131を呼吸で吸い込んだ場合に母乳から排出されると想定されるヨウ素131の量より、実際の母乳の放射能濃度（常総生協・厚労省ともに）の方が10倍～20倍高かったことを紹介しました。

4月末になって空気中のヨウ素131の濃度が相当程度に低くなっているにもかかわらず、検出されないとされた母乳からヨウ素131が「検出されてしまった」ことに厚労省や日本産婦人科学会もたいへん驚き、悩んだ形跡があります。

○日本産婦人科学会の先入見と、事実を見ないにじつけ

日本産婦人科学会の英文論文の結論（Conclusions）は、なんと「ヨウ素131による環境の汚染が低くても、母乳汚染が起きることがある」です。

厚労省に依頼されて、あわてて取りまとめた様子がかがえませんが、学者さんたちの頭は「ヨウ素131と甲状腺がんの関係はチェルノブイリ原子炉事故によって得られたが、吸収摂取は2～13%程度であって、87～98%はヨウ素131に汚染された牛乳による経口摂取が主な要因だった」（Journal.vol38,No5 P776）との説に囚われてしまい、日本における福島原発事故後のヨウ素131の輸送や空気中濃度、そしてその吸入についての事実の検討をまったく検討していません。そして日本の市民消費者の食や水などの汚染への高い意識と注意を無視しています。

逆に世界に向かって「日本の市民の多くは汚染された水や野菜の危険性に気付かず食べてしまったのであろう（may not have been aware of **the danger**）」などと言い放つ始末です。

しかし、事実と違うことをつじつまをあわせるためか、「医療目的で経口または静脈注射で投与されるヨウ素131は甲状腺と乳房組織に蓄積されて母乳に排出される」が、「海藻類を多く含む日本食では安定ヨウ素が甲状腺にも乳房組織にもあらかじめ蓄積されているので、放射性ヨウ素131が入ってきても母体に蓄積されずに、母乳に排出してしまう」これが、4月になっても母乳からヨウ素131が出てきた原因だと言うのです。

日本産婦人科学会の先生たちの論理では、日本人の母親は食事からヨウ素をたくさん摂取しているから有害なヨウ素131は母乳へ高率に排出してしまうということになります。本当でしょうか。

○日本人の食とヨウ素の母乳移行率の検討

日本産婦人科学会の論文によると、摂取したヨウ素131のほとんどが母乳から出ていった（100%近い移行率）かのような論調です。

先週紹介したヨウ素の母乳への移行率28%、甲状腺への移行率20%はいずれも食事にヨウ素が少ない外国人の例です。常総生協で試算したのは、母乳への移行はそれより低い20%と想定しました。

1968年に日本人の50名のお母さんが協力して食事と母乳の関係を調査した研究があります。この研究は放射性ヨウ素を用いたものではありませんが、外国人に比べて食品からのヨウ素摂取量が桁違いに多い日本人の食事と母乳にどの程度移行しているかを調べた研究です。お母さんが食べた食事と母乳に含まれるヨウ素の量を直接分析しています。

それによると、食品中のヨウ素の母乳への移行率は5～10%が多く、特に一日5ミリグラム以上食事からヨウ素を摂取しているお母さんの母乳への移行率は1%以下であることが示されています。

下記の表はヨウ素の一日摂取量と母乳への移行率の日本人と欧米人を比較したものです。

	ヨウ素摂取量	母乳への移行率
日本人	0.35～21mg/日	0.1～16.6%
欧米人	0.2mg以下/日	13.5～27.0%

これは、学者さんたちの言っている「すでにヨウ素が乳房組織に蓄積されているから母乳に出してしまうんだ」というのとは逆の事実です。

母体は自分の身体にすでにあるからといって、赤ちゃんに必要以上の余分なヨウ素を飲ませるようなことはしないということです。逆に食事から十分に摂れない欧米人は、一生懸命赤ちゃんにヨウ素を与えようと努力していることが覗えます。いずれも母体の神秘です。

とすると、日本産婦人科学会の先生が想定するような高い移行率ではなく、常総生協の試算した20%でさえ高いと判断されます。

○空気中ヨウ素131濃度は桁違いに大きかった？

にもかかわらず、事実として検出されたような濃度のヨウ素131が母乳から出てくるのは、摂取量（吸入量）が桁違いに大きかった、すなわち空気中の濃度が桁違いに高かったことを物語っています。しかもブルーム通過後の4月末に至っても濃いヨウ素131のガスが地表に漂っていたと考えられます。

当初、生協ではヨウ素131も雨で地上に沈着したのちに、再び「気化」して濃いガス状になって漂っていたのではと考えました。セシウムは地上に沈着して土壌粒子に固着してしまい動かなかったのでは・・・と。

しかし、ヨウ素131は、90%がガス状（I₂分子）で、雨滴に付着して降下することはないことを知りました。地表への沈着も接触によるもので「乾性沈着」が主とのこと。

しかも、セシウムのブルーム（雲）とヨウ素のブルーム（雲）はまったく違う動き（大気輸送）をすることから、地上に沈着したセシウムの土壌沈着の汚染マップでは初期被曝は推定できないことを示唆しています。ヨウ素131は単独でそのホットスポットが推定されなければならないことになりました。次回からいよいよ甲状腺への影響について。